

## 渋谷定輔著『農民哀史』にみる大正時代の食生活

駒木 敦子\*

Taisho Era Eating Habits as Seen from the Writings of  
Shibuya Teisuke in “Farmer’s Sad Tale” [J1]

Komaki Atsuko

## 1. はじめに

ある地域でのかつての日常生活の様相を知るためには、古老からの聞き取りや古文書の読解が必要である。しかし、いずれの方法にしても“覚えている”あるいは“記録された”という限られた内容から歴史を再構成する作業になるので、物覚えのいい古老、詳細に記録された日記などに会えることはたいへんありがたい。

筆者が日常的に聞き取りを行っている埼玉県富士見市は、農民運動家・農民詩人として知られる渋谷定輔（1905－1989）の出身地である。彼の著書『農民哀史』<sup>1)</sup>には、大正14年（1925）5月1日から昭和元年（1926）12月31日までの間に彼が記した日記が収録されている。明治38年（1905）、埼玉県入間郡南畑村（現富士見市）に自作兼小作農家の長男として生まれた彼は、小さい頃から農業労働にあけくれたが、17才のときに小作料軽減要求の農民運動（南畑小作争議）に加わった。その後、大正14年12月に創立された全国組織の農民自治会の主力メンバーとして本格的に農民運動を始めた。厳しい農作業の日々を送りながら、詩を作り、日記を綴った。この日記を書いたのは、『女工哀史』を執筆中の細井和喜蔵との約束がきっかけだった。渋谷はある詩誌の集まりに参加するようになって細井と知り合った。細井が渋谷に「ほくは女工の生活を記録するから、君は『農民哀史』というようなもので農民の生活を記録して、女工を生み出す農民の生活実態を示してくれないか」と話したのである<sup>2)</sup>。

こうして世に出された『農民哀史』は、大正時代の当地の小作農家の生活を知ることができる貴重な資料となった。現在、この時代の話ができる古老は皆無といってよい。小稿では、本書に書かれた食べ物に関する記述から、当時の食生活を探してみたい。

\* こまき あつこ 富士見市立難波田城資料館

## 2. 小作農家の食生活

### (1) 『農民哀史』のなかの食べ物

今回は、上下巻からなる本書の上巻部分、大正14年5月1日から15年7月31日までの記述を扱う。この間、15年1月14日から2月末日まで記述がないが、それ以外はほぼ毎日書かれている。およそ1年半の日記のなかに食べ物の記述は77カ所あった。表に記述箇所の年月日、食べ物、場所、分類、状況を書き出した。なお、大正15年は12月25日に昭和元年と改元された。

分類はその食べ物がどのような状況で食べられ（または扱われ）たかという点を判断基準とし、日常的に食べたもの<日常>、薬用として食べたもの<薬用>、冠婚葬祭や年中行事などに際して食べたもの<行事>、災害時に食べたもの<災害>、他人にごちそうされた（またはした）もの<ごち>、土産としてもらったもの<土産>、自宅以外で食べたもの<外食>、計7種類に分類した。それぞれの記述数は、日常23、薬用5、行事18、災害1、ごち18、土産6、外食6である。以下に記述内容について概観する。

### (2) 日常的に食べたもの

23カ所の記述があり、最も多い。毎日の食事は、米と麦割を一緒に炊いた麦割飯（麦飯ともいう）とタクアンであり、時にゆでた里芋もあった。自宅から離れた田畑での仕事には昼食ににぎり飯を食べているが、この飯も麦割飯であろう。米と麦の比率は書かれていないが、15年5月8日に「米7分・麦3分の食事なので、何の日かと思ったら、5月のお釈迦様の日だった」という記述があることから、ふだんは米よりも麦が多かったことが想像できる。

農作業の休憩時には、アラレ、カキモチ、里芋の煮付けを食べた。アラレ、カキモチは、粟のかき餅、粟のアラレ、アラレ餅との表現があることから、米の餅から作られたものではなく、粟の餅から作られたものだろう。

### (3) 薬用として食べたもの

5カ所の記述がある。足が痛む父に飲ませたものは、たまご湯とゲンノショウコの煎じ薬。父の腹痛に効くと叔父さんが見舞いに持ってきたものは、5～6年経った梅酢。自分の腹痛には熱い味噌汁を飲んだ。病気の母には乾物屋から八つ目うなぎを買った。目が悪くなった近所の年寄り、「医者ほうなぎか牛肉を食えというが、そんな高価な栄養物は一生食うことはできない。1日50～60銭の日雇いでは麦割飯を食った後は、せいぜい砂糖か干しうどんでも唯一の養生だ」と話す。大多数の農家は医者にかからなかった当時、養生のために食べたものは、民間療法として伝えられたものが主なものであった。

### (4) 冠婚葬祭や年中行事などに際して食べたもの

18カ所の記述がある。日常食に続いて多い。日光への代参者からお札とともに配られた菓子、木綿の収穫を祈る行事である木綿坊主の草餅・白餅・ボタ餅、隣村のセンゲン様（浅間神社の祭礼）で買ったビワ、病床にあった父の快気祝いの赤飯、用排水路さらいという集落共同作業後のうどん講で食べたうどんと酒、稲の収穫祝いのボタ餅などである。餅、うどん、赤飯など、手のかかる食べ物が特別なときに食べられた。農作業の節目にあわせた様々な行事が多くあったが、

ふだん食べられないものを食べる機会だった。当時の人々が楽しみにしていた様子が読みとれる。

#### (5) 災害時に食べたもの

1カ所に記述がある。当地は荒川と新河岸川に挟まれた低地にある水害常習地であった。洪水時に水防小屋を拠点に復旧作業等に従事した際、にぎり飯が3つ配給された。麦飯か白米の飯か書かれていないが、「こんなところで食うとうまい」と書かれているので、ふだんと同じ麦飯だと思われる。

#### (6) 他人にごちそうされた（またはした）もの

18カ所の記述がある。渋谷は農民自治会の主力メンバーとして東京に行く機会も多く、交友関係も広がったため、まわりの農家よりごちそうされることも多かったようである。

当地からいちばん近い町場である志木町（現埼玉県志木市）の友人宅でごちそうになったのはトンカツ、ビール、そば、牛乳、もち菓子、氷水。もち菓子は「第一に欲しいうまい食べ物」と別の箇所書かれている。

東京の知人宅では当時まだ珍しかったキャベツをごちそうになった。東京の農民自治会会員宅での会合で、夫人が作ってくれた里芋の塩ゆで・五目のにぎり飯\*などは、「まったく農民的会合だ」と会員たちを喜ばせたが、ふだん麦飯を食べている渋谷からすれば、特別なときの食べ物だったことだろう。

また、東京での、ある研究会の後の懇親会では神田の牛肉屋で酒・刺身・飯が出た。会費は2円だというので驚いて退席しようとするが、心配しなくてよいと言われとどまった。ごちそうになったのである。

1皿10銭のスシと大福1個も東京の友人がごちそうしてくれた。

近所の家からもらった、あるいはごちそうになったものは鉄砲玉、せんべい、うどん。東京から訪ねてきた友人に母が出したものは、お茶とカキモチだった。

#### (7) 土産としてもらったもの

6カ所の記述がある。東京から訪ねてきた友人から菓子包み、ミガキニンシをもらった。土産とは言えないかもしれないが、友人から南京豆、村芝居で会った青年団長からミカン、川越の親せきからタクアンをもらった。

#### (8) 自宅以外で食べたもの

6カ所の記述がある。やはり外食の機会も多かったようである。東京の食堂でとった朝食は、メシ・味噌汁・漬物・野菜とコンブの煮物だった。メシは白米。「うまかった。白米のメシはありがたいが、量が少ないのが残念だ」と書かれている。志木の料理店では、入営送別会を兼ね、友人とすき焼きとぶどう酒を食べた。農民自治会の会合で東京に出たときには、喫茶店でよくコーヒーを飲んだ。

---

\* 「にぎりめし」、「にぎり飯」、引用著書本文では両方の記述があるが、小稿では「にぎり飯」に統一した。「たくわん」、「タクアン」も引用著書本文では両方の記述があるが、「タクアン」に統一した。

### 3. 農民運動家としての観察

他にも興味深い記述がいくつもある。農民運動家としての観察眼による記述である。三つ指摘する。

一つ目は大正14年11月3日の記述で稲の収穫祝いの刈り切りボタ餅についてである。「(自宅で作ったもち米を使うのだが、)うまい水稲のもち米を作りながら、陸稲のまずいもち米を食わねばならぬとは、ウソのようなホントだ」とある。多額の小作料を地主に支払うために高く売れる良質の米は売らなければならない、自分たちの口に入ることはなかった。

二つ目は大正15年5月28日の記述。「(地主の家には)一匹数百円もする犬が三匹いて、米の飯と牛肉三百匁、牛乳三合ずつ与えているという。それからほど遠からぬところには、誠実な小作人一家があり、父親がリュウマチで三年間も寝たままである。まだ一度も医者に見て貰えないのみか、家族四人が餓死寸前に追いつめられている。いったい、この眼前の事実を人びとは知っているのだろうか。私はまず農民自治会に応急扶助部を設け、なんとしてでも、この一家を救わねばならぬと考えた」。渋谷は時折、家族の目を盗んで自宅の米や麦を差し入れする。このころ設立された南畑農民自治会の最初の本格的な運動として、この一家を救済する運動に取り組みはじめてのである。

三つ目は大正15年7月28日、共同作業で行う堀の草刈り後のうどん講についての記述。「(草刈りは)午後、陽の高いうちに終って、清酒二升で、うどん講だと張り切っていた。百姓の一日の食費代は、四銭五厘だと言われているが、これを見ても、いかに商品価値の低い粗食で生きているかがわかる。こうした百姓にとって、二十銭で酒二升と、うどん満腹できることが、楽しい宴会であるのも当然だ」。他の記述にも言えることだが、常に金銭感覚を伴った、農民の労働・食生活についての記述となっている。

### 4. おわりに

上で見てきた大正時代の食生活の内容は、過去の民俗調査報告である『埼玉県入間東部地区の民俗一衣・食・住一』<sup>3)</sup>や『富士見市史 資料編7 民俗』<sup>4)</sup>に報告された内容と重なる部分もあるが、その当時に記録されたものから得られる情報はやはり濃い。自作兼小作農家の長男で、農民運動家である著者の記述であるから、誇張された部分もあると思うが、記録に残ることの少ない当時の様子を知ることのできる貴重な資料であることに間違いはない。今回は食生活の一部分のみを扱ったが、農作業の内容や農事暦など他にも読み取ることのできる情報は豊富にある。このような記録が残されたことに感謝しつつ、読み続けていきたい。

#### 参考文献

- 1) 渋谷定輔：農民哀史 上・下、勁草書房、1970
- 2) 富士見市教育委員会：富士見市史 通史編 下巻、富士見市長、302-313、1994  
渋谷定輔：農民哀史 下、勁草書房、692-696、1970
- 3) 入間東部地区教育委員会連絡協議会：埼玉県入間東部地区の民俗一衣・食・住一、同、1979
- 4) 富士見市教育委員会：富士見市史 資料編7 民俗、富士見市長、1989

表 渋谷定輔著『農民哀史』に書かれた食べ物（大正14年5月1日～15年7月31日）

年月日	食べ物	場所	分類	状況
T14.5.1	トンカツ	志木町友人宅	ごち	友人宅で夜食
T14.5.2	菓子	南畑新田・砂原	行事	日光参詣者から配布。午後から農休日
T14.5.2	粟のかき餅	南畑新田の水田	日常	田うないの休憩
T14.5.2	ビール	志木町自転車屋	ごち	
T14.5.12	草餅、白餅、ボタ餅	南畑新田	行事	木綿坊主。親類に配布
T14.5.29	にぎり飯	南畑新田の水田	日常	田かき、十時休みか
T14.6.2	うどん	自宅	行事	蚕上がり祝の夕飯
T14.6.7	粟アラレ、カキモチ	砂塚の桑畑	日常	十時休み
T14.6.20	ボタ餅	自宅	行事	田うえ終わりの祝
T14.6.21	たまご湯、ゲンノショウコの煎じ薬	自宅	薬用	足が痛む父に飲ませる
T14.6.30	熱い味噌汁	自宅	薬用	腹痛が少し収まり、暖めるため
T14.6.30	5～6年経った梅酢	自宅	薬用	父の病氣見舞い、腹痛に効く
T14.6.30	ピワ	宗岡村センゲン様	行事	ピワ祭り、ピワの露天市が立つ
T14.7.30	赤飯	志木町友人宅	行事	父の床上げの（快気）祝い
T14.8.14	そば	志木町友人宅	ごち	夜食にごちそうしてくれた
T14.8.22	もち菓子	南畑	ごち	第一に欲しいうまい食べ物
T14.8.27	にぎり飯3つ	水防小屋	災害	大洪水時の配給
T14.9.14	麦飯	貝塚山の山林	日常	畑仕事の昼食
T14.10.7	うどん、酒	南畑新田・砂原	行事	用排水路浚い後のうどん講。1人22銭の会費
T14.11.3	ボタ餅	自宅	行事	稲の収穫祝の刈り切りボタ餅。*「うまい水稲のもち米を作りながら、陸稲のまずいもち米を食わねばならぬとは、ウソのようなホントだ」
T14.11.27	麦割にシイナ（上）を入れる	自宅	日常	常用。シイナにも上下がある。双方とも味はまったく良くない
T14.11.27	シイナ（下）は石臼で粉にして団子などをつくる	自宅	日常	
T14.12.2	鉄砲玉、せんべい、うどん	近所の家	ごち	代わりに桑枝を受け取りに行った御礼にご馳走してくれた
T14.12.2	醤油	鶴瀬の親せきの家	日常	父が醤油しほりの手伝いに
T14.12.13	メシ、味噌汁、漬物、野菜とコンブの煮物	日本青年会館（明治神宮そば）近くの食堂	外食	朝食。*「うまかった。白米のメシはありがたいが、量が少ないのが残念だ」
T14.12.17	甘酒	自宅	土産	泊まりに来た親せきが持ってきてくれた
T14.12.19	南京豆	友人宅	土産	千葉の産地から取り寄せ、売って歩く友人からもらう
T14.12.19	すき焼き、ぶどう酒	志木の吉田屋料理店	外食	入営送別会を兼ね友人と
T14.12.22	ミカン	南畑の村芝居	土産	青年団長がくれた
T14.12.22	まんじゅう	本家	行事	祖父の葬式。駒林のまんじゅう屋に注文

年月日	食べ物	場所	分類	状況
T15.1.2	雑煮	川越の親せき宅	行事	泊まった翌朝の朝食（年始と入宮挨拶）
T15.1.5	コーヒー	神田錦町の喫茶店	外食	農民自治会
T15.1.6	キャベツ（朝鮮白菜）	淀橋柏木の知人宅	ごち	知人宅で炊事。*「朝鮮白菜はうまかった。キャベツというのだそうだ」
T15.1.8	お茶、食事	砂原部落の各戸	ごち	入宮の挨拶まわり。どの家でもすすめられた
T15.1.9	赤飯	自宅	行事	明日の入宮を祝う。早朝からたくさん人が集まってくる
T15.3.1	牛乳、餅菓子	志木の菅野書店	ごち	夫人がご馳走してくれた
T15.3.2	うどん、酒	自宅	行事	虎祭りの宿。うどんは製麺を注文。*うどんがすっかり機械の力でできるようになったことに感心。「百姓までぜいたくになった」「今に東京ものようになるべ」
T15.3.5	コーヒー、オムレツ	東京の喫茶店	外食	農民自治会
T15.3.30	*ビスケット、せいべい	弟の家	日常	8ヶ月の赤ん坊が食べられるようになった
T15.3.31	たくわん	自宅	土産	川越の親せきが持ってきてくれた
T15.4.10	赤飯、餅	自宅	行事	勝瀬の親類から榛名祭りなので
T15.4.15	草餅	自宅	日常	昼食
T15.4.17	コーヒー	東京の喫茶店	外食	農民自治会
T15.4.24	里芋の煮付け	田	日常	田うないの十時休みに母が持ってきた。*「かしらだが皮をよくむいて醤油で煮てあるのうまい」
T15.4.26	*八つ目うなぎ	志木の乾物屋	薬用	病気の母に食べさせたいと3匹買う。1匹15銭だが、3匹30銭
T15.4.28	アラレ餅	田	日常	田うないの十時休み
T15.4.28	駄菓子	下田の駄菓子屋	日常	店の脇の掲示板に貼られていた農民自治会の趣意書が破られたいきさつを尋ねるため、必要もない10銭の菓子を買った
T15.5.5	コーヒー	志木の喫茶店	外食	友人と
T15.5.6	里芋の塩ゆで、五目のにぎりめし、とうふの味噌汁、竹の子の煮付け	高井戸村の友人宅	ごち	農民自治会。会員夫人が作った。*「みんなはまったく農民的会合だと喜ぶ」
T15.5.7	お茶、五目のにぎりめし2個	高井戸村の友人宅	ごち	鶴瀬の家から頼まれた摘田の手伝いに行くため、帰る朝の食事に出してくれた
T15.5.8	米7分・麦3分の食事	自宅	行事	朝食。*「～の食事なので、何の日かと思ったら、5月のお釈迦様の日だった。」午後からは遊び日。
T15.5.11	ボタ餅、草餅	自宅	行事	木綿坊主なので親類からもらったものをお茶菓子として客に出す
T15.5.11	御神酒、うどん	うどん講の当番の家	行事	盛大にやることになった恒例の夜のうどん講。*「今夜はうどん講で明日は木綿坊主じゃ、いいな」。大衆がいま求めているものは第一に食物。しかも常食とちがったうまいもの
T15.5.15	麦割飯、タクアン	自宅	日常	養蚕の巡回教師に食べさせた。常食
T15.5.17	餅	自宅	行事	木綿坊主なのでついた餅を親類に配る

年月日	食べ物	場所	分類	状況
T15.5.17	酒、刺身、飯	神田小川町の牛肉屋	外食	啓明会の研究会後の懇親会。*会費2円と聞いて驚き、退室しようとする
T15.5.25	うどん	隣部落の友人宅	ごち	『農民と自治』配達時、夜食にご馳走してくれた
T15.5.28	*米の飯、牛肉300匁、牛乳3合	大地主の家(犬の餌)	日常	人づてに聞いた大地主家の飼犬3匹の餌。近所の小作人の家では病気の父親が医者にかかれず、家族4人が餓死寸前という状況を嘆く
T15.6.2	菓子包み	自宅	土産	東京から初めて訪ねてきた農民自治会全国委員の竹内愛国君の土産。50銭くらいか?との付記あり
T15.6.9	ゆでた里芋	自宅	日常	頼まれた田かきから帰ったときに母親が煮ていたものを食べた
T15.6.10	くされかかった里芋とタクアンで麦飯	自宅	日常	昼食。*メ粕を粉末にしておうために牛で志木へ。仕事が済んだ午後2時半。空腹だが、「百姓の苦しみに生み出す“金”を思うとたとえ5銭か10銭の中食でも町で食べるのは恐ろしい」と牛とともに帰宅して食べた
T15.6.10	お茶	川越警察署	ごち	『農民自治』発送が新聞紙法違反の疑いがあるとのことで事情聴取に呼び出された署で要求して出させた
T15.6.12	昼食*飯を食う余裕がない	自宅	日常	田かきをしていたところ、雨が降りそうだから麦刈りを手伝うように言われ、牛を洗って帰宅。空腹だったが雷雨が迫っているため時間がない。刈り入れ後、遅い昼食をとったあまり空腹になりすぎ、かえって食欲なくなる。眠りたい欲求のほうが強い
T15.6.12	固いぼろぼろの麦割飯に塩辛いタクアン	自宅	日常	夕飯。*「何という過労と粗食の現実だろう!」
T15.6.13	*麦飯	自宅	日常	*田かきに馬を貸してくれた裏の家の若者と「こんな苦しみを知らないやつらが米を食って、こんなに苦しんでおれらが麦食って!ちきしょう!」と話す
T15.6.15	お茶、カキモチ	自宅	ごち	昼食休みに訪ねてきた志木町の友人に母が出してくれた
T15.6.19	茶漬け	自宅	日常	夕飯
T15.6.25	にぎり飯	豆畑	日常	午前9時頃、麦刈り後のぼっこぬき作業の休憩に手伝いの卵屋と2人で
T15.6.25	ミガキニシン	自宅	土産	東京から訪ねてきた友人の竹内愛国君が土産に持ってきた
T15.6.27	*白米1升、麦割3升	自宅	日常	餓死寸前の一家へ家人に内緒で差し入れ
T15.7.4	*うなぎか牛肉	近所の家	薬用	目が悪くなった近所の年寄りの話。「医者はどうなにか牛肉を食えというが、そんな高価な栄養物は一生食うことはできない。1日50~60銭の日雇いでは麦割飯を食ったあとは、せいぜい砂糖か干うどんでも唯一の養生だ」
T15.7.12	お茶	川越警察署	ごち	先日の事情聴取書記載について呼び出された際に出された
T15.7.12	*白米2升	自宅	日常	餓死寸前の一家へ家人に内緒で差し入れ

年月日	食べ物	場 所	分類	状 況
T15.7.15	1皿10銭のスシ、大福1個	東京・九段下付近	ごち	農民自治全国委員会のため上京の夜、竹内君の家に宿泊した翌日。平凡社など回ったときの昼食。竹内君のおごり
T15.7.15	氷水	志木の書店	ごち	東京からの帰りに立ち寄ったところ、夫人が出してくれた。先頃『農民と自治』発行所となった書店
T15.7.28	清酒2升、うどん	不明	行事	新堀の共同草刈り後のうどん講。*「百姓の1日の食事代は4銭5厘だと言われているが、これを見てもいかに商品価値の低い粗食で生きているかがわかる。こうした百姓にとって、20銭で酒2升とうどんで満腹できることが楽しい宴会であるのも当然だ。」
T15.7.31	氷水	新宿の雑誌社付近	ごち	農民自治会の友人が原稿料でごちそうしてくれた。*「とてもうまい氷水」

【表註】

- (1) 「食べ物」は実際に食べたものを取り上げた。  
\*印は食べていないが話題に出てきた食べ物。
- (2) 「食べ物」欄の記述は著書にある表記のままなので、同一のものでも統一していない。
- (3) 「状況」欄の\*印以下には本文に書かれたコメントや台詞を取り出した。